

白門特派員通信

佐藤光信氏が第12回水木十五堂賞を受賞

歴史や伝統文化などの分野で資料収集や社会に貢献した人物として、中央大学学員会の元副会長佐藤光信氏が「水木十五堂賞」を受賞。長年にわたる浮世絵の収集・保存・公開の功績が称えられた。 白門特派員・浅田善嗣(奈良白門会)

授賞式および受賞記念講演を行う佐藤光信氏(中央)



国内屈指の量と質を誇るコレクション

令和6(2024)年2月11日、奈良県大和郡山市の郡山城ホールに於いて、第12回水木十五堂賞の授賞式並びに受賞記念講演会が開催されました。この賞は大和郡山市の主催で、古典芸能・工芸・日本文化を広く研究し世に知らしめた水木十五堂先生の功績を称えて創設されたものであり、歴史や伝統文化などの分野で資料収集や社会に貢献した人物を表彰しています。本年の受賞者は、中央大学学員会の元副会長佐藤光信氏(89歳)であります。佐藤様は、現在、公益財団法人平木浮世絵財団理事長を務められており、長年にわたり浮世絵の収集・保存・公開等に尽力されてきた功績により受賞されました。

今回の授賞式の1週間前に突然、私に佐藤様よりお電話をいただき、今回の受賞のお知らせと、奈良に来県されるのでお会いできるという事で、早速授賞式の観覧申し込みを致しました。2,3日後には佐藤様から、今回の授賞式とご自身の経歴に関する資料も送って頂きました。

授賞式当日の受賞記念講演・演題「浮世絵を楽しむー

黄雀文庫コレクションからー」でもお話されましたが、佐藤様は久留米市のご出身で、中大陸上部0Bで箱根駅伝の伝説のランナー(2回の総合優勝と3回の区間新記録の達成)であるという事を知り、とても驚きました。また、卒業後、リッカーミシン社に入社し、平木信二社長の片腕として活躍されました。そして平木社長の収集されていた浮世絵等のコレクションを中心に、リッカー美術館(平木浮世絵美術館と改称)の設立にも尽力され、現在の平木浮世絵財団の理事長就任に至っておられます。現在はコレクションの展示施設は閉館していますが、展覧会を企画し、また各地の博物館・美術館での出展を行っており、広く浮世絵の認知・紹介に携わっておられます。

本講演では、事業に関する数々のエピソードをお話になり、浮世絵美術館の設立に当たっては、世界中の著名な美術館を調査するため、当時はボストンやニューヨーク、パリなどに渡航されたりし、世界規模の浮世絵コレクションを公開していたということです。また、佐藤様個人のコレクションとして浮世絵のなかの「鯉絵」というジャンルで収集家としても著名でおられ、コレクション名が「黄雀文庫コレクション」

と称します。本ホールでは当日はコレクションの一部の展示もしていました。

今年の箱根駅伝が残念な結果に終わり、落ち込んでいた私でしたが、佐藤様からの連絡でわくわくした気分で授賞式当日を待ちわびました。当日は、松村大阪支部長と共に授賞式を観覧、佐藤様の講演を拝聴し、合間で、佐藤様にも直接お会いし僅かな時間ですが歓談することも出来ました。

また、1時間にわたる授賞式後の講演では、ずっと起立したままお話されていて、エネルギー溢れるそのお話に皆聴き入りました。聴衆の方々も御年まもなく90歳と聞き驚いていました。

講演後、本賞の選考委員の方々との座談会もあり、浮世絵に関する楽しい知識を沢山得ることができました。ここでも、講演のお疲れもなく、ジェスチャーも交えながら解説なさっていて、本当に年齢を感じさせない熱演で、大変勇気づけられました。

佐藤様との懇談の中で、またの再会を約しました。母校0Bの、お元気で活躍される姿に接し、私も元気をいただき、今年も頑張っていこうと決意した次第です。

白門特派員通信

令和6年能登半島地震を受けて

令和6年の元日、能登半島を襲った大地震。道路が寸断されいまだ復旧作業が続く現地より、被災状況と今後の支援活動について報告。 白門特派員・木村岳二(石川支部)

学員会小林副会長より支援金を拝受する大友支部長、山本会計幹事



はじめに~支援金の拝受と学員会への感謝

1月26日、小林治雄副会長が金沢にお越しになり、久野修慈会長はじめ役員の方々からの温かいご支援金を拝受いたしました。ご厚情に感謝申し上げます。今回頂きました支援金は配布方法を決めて役立てさせていただきます。そして、4月24日の役員会並びに7月27日の総会にて今回の温かいご支援を報告させていただきます。

震災状況

令和6(2024)年の元旦16時10分、マグニチュード7.6(暫定値)の地震が能登半島を襲いました。能登から150キロ以上離れた加賀でも震度5強の強烈な揺れを観測。そして、大津波警報の発表が報じられました。

能登半島では、令和5(2023)年5月にも震度6強を観測するなど、およそ3年にわたって活発な地震活動が続いておりました。能登半島地震はおよそ150キロの活断層がずれ動いて起きた可能性があるとして政府の地震調査委員会が評価しました。能登半島の西側では90キロにわたり海底が4メートル以上隆起、海底が完全に露出した漁港もあり、漁業は壊滅的な被害を受けています。

被災者としての支部会員

事務局にて被災を把握している方は以下の通りです。

輪島市のH会員(昭60文)が亡くなりました。心よりご冥福をお祈りいたします。七尾市のK常任幹事(昭47年経)は住居が使用不可能となり、鳳至郡能都町のI常任幹事(昭60文)は住居や作業所がかなりの損壊があり、二週間程車中泊を余儀なくされるも現在は家の安全が確認され居住しております。また、鹿島郡中能登町のS常任幹事(昭47商)は住居が被害を被ったとの事でしたが、現在では問題無く住んでおります。

支援者としての支部会員

毎年、石川県の総会準備担当を石川県、金沢市、北國銀行が担っております。この三団体がまさに被災地支援の主役となっております。支援者としての筆頭支部会員は、当支部副支部長の石川県副知事の徳田博氏。馳知事が震災時に在京していたことから、震災直後に県庁に入り陣頭指揮をとっています。副支部長の中には、商工会やロータリークラブの要職に就いている方もあり支援に取り組んでおります。建設業を営むE副支部長は、珠洲市での道路啓開作業と復旧作業にあ

たっています。会員には士業が多いことから、金沢弁護士会や北陸税理士会など公的支援を行っております。

おわりに~復興に向けて

能登半島は、縦に長く多くが海に面しているため能登に向かう道は限られております。今回の地震で大動脈である道路が寸断され被災地が孤立したため、緊急車両、工事車両等が現場に到着するまでに長時間かかり復旧作業が進まない要因となっています。また、能登地区の宿泊施設の多くも被災しているため、復興の工事関係者の宿泊場所が確保できず、日々遠方(金沢等)から数時間かけて現地入りしており、実際の作業時間が短く、復旧の遅れにつながっています。

復旧にはこのように多額の費用と日数がかかり、石川県だけでは力不足であり、全国的な支援が切望されます。義援金を募る活動や学生ボランティアの出動が始まっており、更なるご支援を御願ひしたいと考えております。

夜明け前が一番暗いと信じ、一日も早い復興を心より祈念しております。